ちりめん産地の織元からエレガントなオリジナル風呂敷を提供
山藤織物工場

日本三景の一つ、天橋立近くの与謝野町で、伝統の白生地織りの技術を生かし、インターネット販売を通じて売り上げを伸ばしている織物業の老舗、山藤織物工場の当主 山添憲一 氏にお話を伺いました。

創業以来、丹後ちりめんの白生地を織り続けて170有余年

山添ご夫妻

戦前までは着物地を織り、戦時中も機を止める織元が多い中、パラシュートや軍人さんのコート地を織り、機を動かし続けていました。五代目の先代から風呂敷地や帯揚げ、半襟などの和装小物の白生地を手掛けるようになりました。

山藤の白生地が長きにわたってお引立ていただけてきたのは、生地の風合いに現れる安定した品質の高さを保ってきたからでしょう。風呂敷地には絶対の自信があります。特に手書きの染屋さんにとっては、良い生地でないと染めが台無しになるものです。

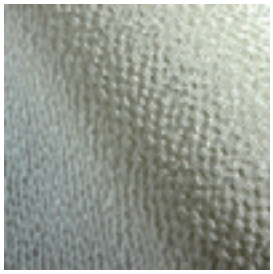
13年前からはオリジナル風呂敷やマフラーなどの完成品を作り始めました。

使う人、贈る人の想いが込められる山藤の風呂敷

今、一番多く手掛けるのは、使われる方のお名前を入れた名入れ風呂敷で、字をデザイン化したり篆書体（てんしょたい）をよく使います。そして、お客様のご希望を聞いて、デザインや色、染めの方法や価格まで含めて、一番その方に合ったオリジナルな風呂敷を提案させていただくものも多いです。亡くなった方が生前書かれたちぎり絵に、少しメリハリをつけて作った法事用の風呂敷、書の先生が書かれた字をそのまま入れた風呂敷などです。染めにも、型染め、インクジェット染め、無地に染めたものを抜くなどいろいろな方法があり、たくさんのノウハウをしっかり身につけておかねばなりません。基本的に、シンプルで色の綺麗な配色の、美しいものを作りたいです。

葬儀のお返しを、業者から送られてくるカタログから選ぶことに抵抗を感じていた方が遠方からみえ、「探し当てました」と言っていただいたことがあります。また、引き出物に私共の風呂敷を選んでくれた若いカップルが、式や旅行など一切終わって一息ついた頃、どんなふうに作っているのか確認したくて遠くから来られたのは今までになかったことです。私共と細かい打ち合わせをし、その結果をどのように、どんな人がどこで作ったのかを納得することに価値を見出す、そういうふうに考える人が増えてきていると思います。

お客様の気持ちを汲み、さらにその気持ちの先を読んで、この方にはどのようなことを提案してあげられるかを考え接することがお客様に喜んでいただけ、お客さまにとっての価値となっていると思っています。そのようにして、たとえ一枚からでも、今のライフスタイルに合ったデザインの、オリジナルな風呂敷の提案をどんどんしていきたいと考えています。

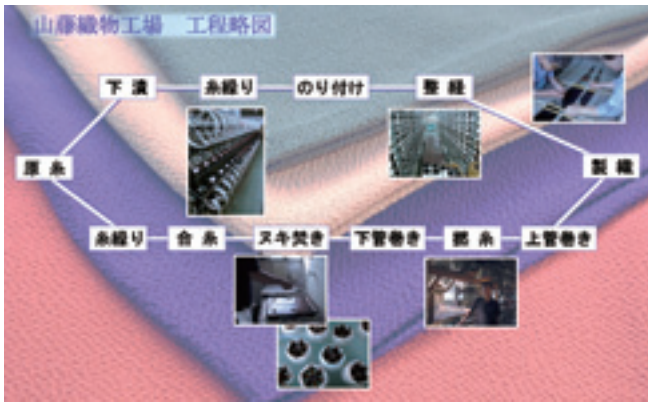

“極”の鬼シボ

一方、無地の風呂敷にも根強い人気があります。中でも“極（きわみ）”というシリーズでは80本の生糸を合わせた緯糸（よこいと）を使い、経糸（たていと）の密度も倍と、まるで生糸の固まりみたいな織物です。ずっしりとした重厚感と超弩級のシボは山藤の看板商品の名にふさわしいものです。

丹後ちりめんの“シボ”を生む強撚糸（きょうねんし）

丹後ちりめんは京都府北部・丹後半島一帯で生産された「シボ」を特徴とする白生地です。縮緬特有の凹凸であるシボは緯糸に強い撚りをかけた「撚糸」によって生まれます。丹後織物の特色は、ズバリこの強撚糸なのです。撚られた糸が、精練することによって収縮し、撚りが戻り、その時できるよじれがシボを発生させます。シボを高くしたければ経糸の密度を下げ、逆に経糸の密度を上げると緯糸は戻りにくくなりシボが低くなるのです。経糸の密度を下げシボを高くすると、ビッグウェーブが生まれ見栄えは良くなりますが、コシが失われます。経糸密度を上げることで適当なシボを保ち、かつコシも生まれます。山藤では、高い密度の経糸に対して、緯糸から生まれるシボを確保するため、一般的な撚り回数より10%多く撚りをかけます。その分、緯糸はより強く戻ろうとします。こうしてシボを確保しているのです。コシの強いちりめんでありながら、独特の風合いを保つという相反

120歳超えの八丁撚糸機



する要求に山藤はこだわっています。この強撚糸を使った織物は丹後以外どこにもなく、特に撚りを強くかけて作るちりめんは山藤の得意とするものです。

縮緬の製織工程は大まかに上図のようなものです。多くの工程がありますので、糸繰りだけとか整経だけ、というように、いくつかの工場で分業化されている仕組みが多いのですが、山藤ではすべての工程を手作業により自工場で行います。様々な織物の製作時に、細かく対応できるのです。

丹後の織物業の盛衰

かつては生糸、絹織物業が日本の基幹産業として国を支えた時代があり、その時代からこの地方は非常に潤い、裕福でした。戦後もバブルのピーク時には山藤でも数億円の生地を売っていました。ところが、和装自体への需要減という生活様式や世相の変化の中で、オイルショックを境に生産量は右肩下がりで減り続け、着物地だけを見ても今や20分の１までになっています。

一方、岩滝という地域は着物に対して和装小物を多く手掛ける地域でした。着物屋さんに比べると扱い量や商売も小規模です。着物という本体があって初めて和装小物が売れるわけですから、本体がダメになったら和装小物もダメになるという危機感を早くから持ったと思います。着物地をされているところは、減っては来ているけれども、まだまだいけるだろうという楽観があったのではないでしょうか。充分に潤う時間が長すぎたのかもしれません。また、白生地では大きな問屋さんとの取引の中で、段々買う側次第で値段が決まるようになり、その大手問屋がクシャミをしたら、このあたりの機屋が飛んでしまうようなことが起こり始めました。昭和40年代半ば以降です。

そのような中で、岩滝周辺では、比較的早い時期から、今までとは違うものを開発しよう、素材を変えてみようと洋服地や複合繊維の研究に着手していました。小規模だったおかげで、新しいものに着目する転換、決断が素早くできたのかもしれません。

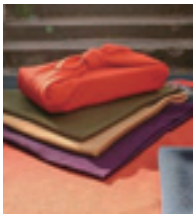
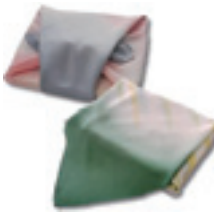
山藤でも売り上げが落ち続けました。このまま白生地を織っているだけでは活路も見いだせず、先も見えません。でも、日本で丹精込めて作ったものを買ってくださる購買層も絶対あるはずだと考え、何か、違った良い方法がないかと模索したとき試みたのがインターネットというメディアでした。

インターネットを介して生まれるアナログな人と人とのつながり

大量に白生地生産していると、どうしても事故で売りに出せない生地もそこそこ発生し、デッドストックになってしまいます。そういうものを切って、悪いところを使わずに風呂敷に使えるという簡単な発想がきっかけで、パソコンでホームページを作って試みに出してみました。1997年のことで、まだ、今程パソコンやネット取引も普及していない頃です。たまたまパソコンを仕事に使っていた隣家の人の協力を得ながら、全く見よう見まねの我流で妻がホームページを立ち上げました。

一介の機屋が直接商品を売るなどということは考えられなかった時代です。また、たった１枚の風呂敷をネット上で「どうですか?」などと言って売ることに半信半疑の目が向けられました。代金回収の問題など、会合でよく聞かれました。けれども、ある意味日本人の素晴らしいところで、品を納めて請求書を送れば、必ず支払ってもらえます。ありがたいことです。顔を見ることもない人間からモノを買う･･･疑心暗鬼だったり不安に思いながら電話をかけてこられるのがわかります。お問い合わせをいただき、お品を送るまでのやり取りの中で、不安要素を少なくし、お客さまの気持ちに添う品をお届けできるよう、細心の注意を払いながら、日々仕事をしております。その姿勢が、お客様との信頼関係を築く基本だと思っています。

当初、インターネット販売の不安はありましたが、ネットで買うお客さんは着実に増えていきました。常に良い製品作りと、細かな対応を心がけ、そしてネット販売を地道に続けたおかげで、徐々に売り上げへの貢献度が高まり、導入後、数年間は、年毎に３倍をネットで売り上げ、一昨年あたりは本業の白生地収入を逆転するまでになっています。

培われた技と本物を信じる感性が生む新たな丹後ちりめんの未来

機屋はもうダメだという固定観念では、消極的、否定的なベクトルしか生まれず、アイデアも浮かびません。逆に外部の人間だからこそ、客観的に本来の魅力と可能性を見いだせることがあります。他県から来た妻が一緒にこの仕事に就いたことは、山藤のもう一つのターニングポイントだったと思います。妻は言います。「地元にさしたる産業もないところから見れば、ここは伝統としっかりした技術の地盤があるところ。世の中で流通している風呂敷の80～90%が無地の風呂敷で、山藤の得意とするところなんだから、廃れていく訳がない」

私はかつて、自分の作ったものの値段が自分で付けられない状況があることを痛感し、買って下さいとお願いするだけの、極端に受け身な販売の仕方をしている織物産地はどうなのかということをこの生業の中でずっと考えてきました。このままだと、後世に伝えていくことができないと、自分の子供が生まれる前から思っていました。ただ、ここにきて、自分で作ったものは自分で売り、お客様に満足していただけることの喜びを実感できるようになりました。若い人を育てて、私たちの退いた後、ちゃんと歩いていけることが夢です。若い人材がしっかりと生活できて、張り合いを持って仕事ができる仕組みと丹後の織物産地を何とか作りたいと思います。

DATA

山藤織物工場
当主　山添 憲一 氏

所 在 地　〒629-2263　京都府与謝郡与謝野町字弓木493
創　　業　1833年
資 本 金　1000万円
従 業 員　7名
事業内容　織物業

【お問い合せ先】
京都府中小企業技術センター
企画連携課 情報・デザイン担当
TEL：075-315-9506 FAX：075-315-9497
E-mail：design@mtc.pref.kyoto.lg.jp